心理学演習Ⅰ　レポート課題

5122020　平原拳誠

B君の遠城寺式乳幼児分析的発達検査法の結果について

B君の暦年齢は3歳0か月であった。運動領域における発達年齢は、移動運動の項目が2歳3か月～2歳6か月と暦年齢よりも少し遅れが認められ、手の運動の項目については0歳11ヶ月～1歳0か月と2歳以上暦年齢から発達が遅れていた。社会性領域における発達年齢は基本的習慣の項目が2歳０か月～２歳３か月、対人関係が０歳６か月から０歳７か月とどちらも暦年齢から遅れがみられ、項目間において著しい差がみられた。言語領域における発達年齢は発語の項目が１歳０か月～１歳２か月、言語理解における項目が０歳９か月～０歳１０か月とどちらも歴年齢から２歳程度、発達が遅れていることが結果から分かった。各領域内における項目間の差異については運動領域内で下位検査７つ分という大きな差がみられた。社会性領域に関しては下位検査１１個分という非常に大きな差がみられた。言語領域においては下位検査３つ分の差が認められた。最後に検査結果全体を見ると、運動領域の移動運動項目が最も発達が進み、社会性領域の対人関係の項目が最も発達が遅れていることがわかる。また言語領域に関しては２つの項目どちらとも発達が非常に遅れていることがわかる。

B君の生活年齢や発達状況を踏まえたうえで、実施すべきほかの検査の計画

　B君へのこれからの支援を考えて、遠城寺式発達検査のほかに実施すべきほかの検査として二つあると私は考えた。

まず一つ目としてWIPPSI‐Ⅲを挙げる。行う理由は、B君の知的能力に関して精査する必要があると考えたからである。また遠城寺式発達検査で言語領域に関して発達の遅れがみられたため４つの必須の基本的検査、１つの補助検査から言語理解(VCI)を含む、知的能力の領域に関する個人内差を詳しく調べることが必要だと考えたからである。そしてWIPPSIに関して大穴(2018)は「知的障害のみならず、発達障害や高次脳機能障害の能力特性の検討に用いることができる。」と指摘しており[[1]](#footnote-1)、これより私はB君への支援方法をより広い目線から考えることために非常に有用な検査であると考えた。

　２つ目の検査としてPARS-TRの実施を考えた。遠城寺式発達検査の結果から明翫(2018)は「全体的には暦年齢を超えていても対人関係や言語理解などが極端に低ければ自閉症スペクトラムなどが想定される」と指摘している[[2]](#footnote-2)。よって自閉症スペクトラム障害の特性の観点からB君の発達経過を見ることで個別支援に繋げやすいと考えたためこの検査を実施した方がよいと考えた。

実施すべき検査を6つの視点からまとめる

　まずWIPPSI‐Ⅲについてまとめる。評価は面接者が検査対象者本人に対して行う。対象者は主に就学前の子供で適用年齢は2歳6か月～7歳３か月であるが、2歳6か月～3歳11か月と4歳0か月～7歳3か月では構成が異なる。所要時間は約40分ほどである。この検査は知的障害や発達障害、高次脳機能障害の特性の検討を目的にしており、5つの下位項目で構成されている(2歳6か月～3歳11か月)。それから評価点を集計してIQや指標得点などの合成得点を求めることで、2歳6か月～3歳11か月向けでは、言語理解(VCI)、知覚推理(PRI)そして全検査IQ(FSIQ)を評価することができる。この検査の結果を解釈するときに中心となるのは、合成得点(IQ、指標得点、総合得点)である。言語理解を得点から解釈するのであれば、得点は言語の理解力及び、表現力の水準を示すことが出来るが、文法スキルや言葉の流暢性などは示すことが出来ない。WIPPSIで示すことが出来ない能力について必要であれば追加でテストバッテリーを組むことも考えてよい。この結果をもとに知能の個人間差(アンバランスさ)を調べることが出来る。

　次にPARS‐TRについてまとめる。評価は面接者が検査対象者の養育者に対して行う。また面接は半構造化になっている。対象者は3歳以上の幼児であり、項目は57項目ある。所要時間は90分程度である。評価は子供の気になる行動に対して０「なし」、１「多少目立つ」、２「目立つ」の3つで行う。この検査は自閉症スペクトラム障害の特性の把握を目的としている。解釈は点数によって行われる。合計得点が9点以上であれば発達障害の疑いがあり、20点以上であれば自閉症スペクトラム障害の可能性があると解釈できる。また検査と並行して症状を変動させうる環境条件についても養育者から聞くとその後の支援に有用なものとなる。ただし注意点として受動型の自閉症スペクトラムの方を対象にすると得点が低くなる。

上記の情報をまとめるために引用した文献

津川律子　遠藤裕乃　(編)　(2018)　公認心理師の基礎と実践　14　心理的アセスメント　遠見書房

本郷一夫　(編)　(2018)　公認心理師の基礎と実践　12　発達心理学　遠見書房

検査以外で必要と考える情報

ほかにB君の支援のために身体発達に遅れがないかどうか見る必要があると考える。B君は遠城寺式発達検査で運動領域における手の動きの項目が移動運動に比べて発達に遅れがあることが認められる。もし身体発達に遅れがあることで微細運動がうまくできないのならば、文字を書くことなどが増えてくる就学の時期よりも前に分かっておくことでB君への支援がより意味のあるものになると考え、必要だと考えた。

またB君の生育環境の情報も必要であると考える。B君が普段過ごしている環境にあった支援を考えたり、周囲の環境がB君にとって最適であるかどうかなどを考えたりと多角的に判断するためにもこの情報は必要であると考える。

1. 津川律子　遠藤裕乃(編)　(2018)公認心理師の基礎と実践　14　心理的アセスメント　(pp110)　　遠見書房 [↑](#footnote-ref-1)
2. 津川律子　遠藤裕乃(編)　(2018)公認心理師の基礎と実践　14　心理的アセスメント　(pp123～124)　遠見書房 [↑](#footnote-ref-2)